

飯干晃一

長編ハード・アクション

# 非情警部2

淫魔教団を覆滅せよ



NON POCHETTE



# NON POCHETTE

## ◆「ノン・ポシェット」 創刊のことば

ノン・ポシェットは、ノン・ブック、ノン・ノベルの姉妹シリーズです。しかし、ポケットなり、ポシェットなりに楽に入る小さな判型、また既成のノン・ブック、ノン・ノベルから生み出されたという事情からいっても、むしろ両シリーズの子どもと申せましょう。両シリーズの数ある本の中から、豊かな心、深い知恵、大きな楽しみに満ち、年月を経て色褪せない「現代の古典」となるべきものばかりを厳選したつもりです。どうか親版のノン・ブック、ノン・ノベル両シリーズ同様、このノン・ポシェット・シリーズをご愛読いただき、進んでご意見、ご希望を編集部までお寄せくださるよう、お願いいたします。

昭和六〇年八月一日

NON・POCHETTE編集部

●ノン・ポシェット—NPN180

## 非情警部 2 ——淫魔教団を覆滅せよ

平成2年7月20日 初版第1刷発行

|     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| 著者  | 飯 干 晃 一                          |
| 発行者 | 伊 賀 弘 三 良                        |
| 発行所 | 祥 伝 社                            |
|     | 東京都千代田区神田神保町3-6-5<br>九段尚学ビル 7101 |
|     | ☎ 03 (265) 2081 (営業)             |
|     | ☎ 03 (265) 2080 (編集)             |
| 印刷所 | 萩 原 印 刷                          |
| 製本所 | 関 川 製 本                          |

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取りかえします。

Printed in Japan.

ISBN4-396-32180-5 C0193

©1990, Kōichi Iiboshi

江苏工业学院图书馆  
非情警部2  
藏  
淫魔教団を覆滅せよ—

一死十飯



祥伝社 ノン・ポシェット

『淫魔教団を覆滅せよ』改題

# 目 次



1 失 踪

2 覆滅命令ふくめつ

3 恐 喝

4 乱交の罟わな

5 脱 出

6 銃 撃 戦

322

264

211

144

70

7



# 1 失 踪

## 1

手が慄えた。無理もないことだった。半年間もこの時を待っていたのだ。擬古典的ブライド・クラシックな造りの廊下には人影もない。それでも桂木正男かつらぎ まさおは目を油断なく廊下に走らせた。

戸外では春の陽光が燦然さんぜんとして、背の高い窓からあかるい光線がいっぱいに廊下にさしこんでいた。ここからでも音楽や人々の歓声かっしょうが聴こえてくる。

フールドフールドつきのマントをはねあげる恰好で桂木正男は中腰になっていた。銀糸で刺繡ししゅうしてある僧衣そういは祭祀用さいしのものだ。腰には藍色あいのサテンのベルトを結んでいる。彼はしっかりと鍵穴に目を注ぎ、慄える手で先を曲げた頑丈な針金を鍵穴のなかに差しこみ、手ごたえを確かめた。黒い小型のカバンは足許あしもとにある。

おちつくんだ。彼は心中で自らを叱った。

高度な訓練を受けた彼の指先は、頑丈だが旧式の錠の構造をすぐに探りあてた。手の慄えは止まった。桂木正男は精神を集中させ、指先に神経を通わせ、曲がった針金の先で、錠の突起をひっかけた。そいつをそろそろと右回転させる。指先に力がこもった。

カチッ。音がした。ロックは解けたのだ。この時はじめて彼は額に汗をかいているのを感じた。

立ち上がって、桂木正男は安堵の溜息を洩らし、手の甲で額の汗を拭ったあと、マントの内ポケットのハンカチを出し、自らの指紋のついた金具のあたりを丁寧に拭いた。ついで薄い絹の手袋を両手にはめ、ノブをゆっくりと回すとドアはひらいた。

部屋のなかにすばやくはいりこむと、桂木正男は慎重に内側から錠を下ろした。高い窓ガラスにはカーテンが下りている。ここは秘書の部屋だった。いつもなら大教主お付きの美しい修道女が机を前にしてすわっているはずだが、きょうはいない。至福教の春の大祭で人々は壮麗な神殿に集まっている。

無人のこの部屋を桂木正男は慎重に眺めわたした。カーテンを通してあかるい光はいりこんでいて、部屋のなかには薄ぼんやりとしていた。机の上にはインターホンと電話機、足許は絨毯だった。この秘書の部屋の突当たりには重そうなマホガニー製のドアがあった。その奥が彼の目ざす大教主の執務室なのだ。

このドアのノブを彼は回した。だが予期したとおり、ここもロックされていた。桂木正男はノブのひっかかる動きを手で確かめた。スイッチを入れて部屋をあかるくしたかったが、彼はしなかった。薄あかりでも大丈夫だ。廊下にいる時には人に見られる危険があったので、手は慄えたが、いっぺんはいりこめば彼は冷静そのものだった。もういちど中腰になり、鍵穴をよく観察した。足許の黒いカバンのファスナーをあけ、手にしていた針金をしまい、先が複雑な形をした別の頑丈な針金を取り出した。

監視用テレビや赤外線非常警報、あるいは単純な非常ベルが設置されていることを想定して、そのための七つ道具をカバンのなかに入れていたが、そのような装置はいっさいなかった。

鍵穴に針金をさしこむ。内部の構造は彼が訓練を受けた時にお馴染みのタイプだ。慎重な手つきで突起を探りあて、針金をひっかけて引っばると、このロックは難なく解けた。

ノブに手をかける。

造作なくそいつは動き、重いマホガニー製のドアは音もなくひらいた。

なかにはいる。カーテンは閉ざされて秘書の部屋よりはいっそう薄暗い。桂木正男は注意しながら足を進めた。歩き慣れないので、毛先が足許にまわりつくぐらいのシャギーの絨毯が敷きつめられていた。彼は机のうしろの窓に近寄り、長いカーテンの重なったところに小さな隙間を作った。この隙間から春の陽光がどっと押し寄せてきて、内部のあらゆるものに乱反射して部屋のなかのものが姿をみせた。

まず桂木正男の目をひいたのは、一方の壁で光る金や銀の模様だった。これは巨大なタペストリーに織りこまれたものだ。正面の机の両横には西洋の騎士の甲冑、ブロンズの女の裸像、あるいは仏像と、雑然とした彫刻が立ち並んでいる。目の前の机は大教主の執務用のもので照明スタンド、ペン皿、灰皿、電気卓上クリーナー、書類をとじたファイル、書籍などが載っていた。もう一方の壁には巨大な本箱のほかに作りつけの棚が長くのびていて、さまざまな色や形をした壺、置き物、像がおさまっているのが見えた。

至福教の大教主石丸聖道いしまるせいどうのコレクションは、国宝や重要文化財クラスだということを桂木正男は聞いたことがあるが、彫刻や壺を吟味してみる余裕は彼にはまったくなかった。

それでも、いちおうは部屋のなかの様子を彼は頭のなかに入れた。

タペストリーを飾った壁の横に、縁に彫刻を施し、上がまるくなったドアがあった。桂木正男はノブをためしてみた。ドアには鍵がかかっておらずにひらいた。なかは執務室より小さいが、ホテルのスイートのベッドルームぐらいの広さがあった。天蓋てんがいつきのベッド、ソファ、テーブルが並んでいる。桂木正男はこの部屋も仔細しさいに観察した。別室のバスルームは意外にひろく、洗面台の奥は大理石の浴槽よくそうがゆったりと設けられていた。壁には大教主の好みらしい女性の裸体画がところ狭しと飾ってあった。

何もあわてることはないが、作業は手早くやるにこしたことはない。彼は大教主の執務室に戻り、すこしあげたカーテンの隙間から外を覗いた。陽光が花壇の色とりどりの花に光を注いでい

る。

もういちど注意深く室内を見た。この部屋にやってくる者たちは、大教主の机の前の応接セツトに腰をおちつけるだろうと彼は想像した。とすれば盗聴器の位置はどこがいちばんよいのか。

黒いカバンのなかから桂木正男は円筒型になった容器を取り出し、なかから掌てのひらの上で転がるぐらいのまるい咳止めドロップ状のものを取り出した。もちろんドロップではない。警察庁特別監査官室別室がひそかに開発した超小型マイクと発信装置トランスミッターが内蔵されていて、二年間は使用可能である。彼はまたカバンのなかからポケットサイズの受信器を取り出し、マントの内ポケットに入れ、それから伸びたイヤホーンを耳に詰めた。盗聴器は大教主の机の上に置いた。

ポケットのなかの受信器のスイッチを彼は指先で受信に入れた。

「こちら、X <sup>ダブルエックス・スリー</sup>X—3だ。Y <sup>ワイエックス・ファイブ</sup>X—5、聴きこえたら応答せよ。どうぞ」

彼はドロップ状の盗聴器をみつめながら、低い声で囁ささやいた。

イヤホーンのなかで返事がした。

「こちら、Y X—5。感度、明瞭度ともに良好です。どうぞ」

「いま、大教主の執務室だ」

「やりましたね」

「ああ、成功だ」

短く桂木正男は答えた。

「これからドロップを設置する」

ドロップではないにしろ、形が似ているので、彼らの間ではM82URはドロップの異名で呼ばれていた。

どこにこのドロップを取り付けるかが問題だった。まず桂木正男は西洋の騎士の甲冑を見た。これは飾り物だ。埃をはいたり、拭いたりすることはあっても、なかまで調べることはあるまい。このなかにドロップを埋めてみたら。彼は騎士の仮面の内側に仮にドロップをセロテープで貼りつけてみた。

「YX―5」

三、四歩離れたところで彼は呼んだ。

「感明（感度と明瞭度）はどうか」

イヤホーンの男の声がした。

「XX―3。何か言いましたか。雑音があって聴きとりにくい」

やはり金属の内側ではトランスミッターはうまく機能しない。桂木正男は騎士の甲冑の内部をあきらめた。セロテープを剥がして、ドロップを元の机の上に戻した。

「YX―5」

「こんどははっきり聴こえます」

「いま、ドロップを設置する位置を調べている」

「了解」

桂木正男は薄暗い部屋のなかを見渡した。目に触れないところに盗聴器を仕掛けなければならぬ。いったいどこがよいのか。

ソファのなかに埋めこめばよいことはわかっているが、もちろんソファに傷をつけることはできない。それなら大教主の机の内側はどうか。だが掃除をする人間の目に触れ、あるいは大教主の脚にさわることも考えに入れておかねばなるまい。

なるべく大教主のすわる位置の近くにM82URを設置したい。もういちど部屋を見渡したが、桂木正男の目はもとの机に戻った。

机がだめなら椅子はどうか。彼はふと考えた。

これは名案かもしれない。彼は背もたれと肘かけのある革製のどっしりした椅子をみつめた。この椅子の裏側を覗く人間はいないだろう。

慎重に大教主の椅子を横倒しにして、桂木正男は裏側を調べた。太い回転軸があって、それが頑丈なX型の脚につながっている。この裏側のいちばん手前のところに彼はドロップをセロテープで貼りつけた。椅子を元に戻す。その椅子に彼は腰かけた。

「YX—5」

彼は呼んだ。

「はい。こちらYX—5」

間髪<sup>かんはつ</sup>を入れずに答えが返ってきた。

「感明良好です」

「しばらく待ってくれ」

「了解」

椅子から立ち上がって、桂木正男は机の前のソファーにすわった。

「YX―5」

彼は再び呼んだ。

「どうかね」

「よく聴こえます」

「ドロップを大教主の椅子の裏に取り付けている。いまおれは机の前のソファーの位置だ」

「その位置でも充分聴こえます」

桂木正男はタペストリー前、入口のドアの位置、もう一方の壁の棚の前からYX―5を呼び出して盗聴の効果を確かめた。

「ひじょうに良好です」

相棒は満足の声をあげた。桂木正男は表情を崩さずに、また机に戻り、椅子を再び横倒しにして、ドロップを貼りつけてあるテープを取り除いた。そして盗聴器を手にとると裏側の紙を剝<sup>は</sup>がした。強力接着剤が底に塗られている。彼はしっかりとM82URを大教主の椅子の裏側にくっつ

けた。

円筒型の容器から、彼はもう一個のドロップを取り出し、隣りのベッドルームにはいった。

「こちら、XX-3だ。別のドロップをテスト中」

「たいへん明瞭です」

「ここは大教主の執務室の隣りの部屋だ」

「どんな部屋なんです」

「ベッドルームだ。ルイ王朝時代のような豪華なベッドがある。壁は女の裸体画だらけだし、バスは大理石造りだ」

「へえ」

「このドロップは大教主さまの睦言むつごを送ってくれるかもしれない」

こんどは盗聴器の位置ロケーション選びは簡単だった。ベッドの裏側でよい。彼はベッドの壁際の裏にもぐって、念のためにセロテープで貼りつけた。這い出してベッドの上に転がってみた。

「YX-5。聴こえるか」

ベッドの上から桂木正男は呼んだ。

「よく聴こえますよ」

「これで、すべてOKだ」

「ご苦労さまでした」